

# 図書彼だより

題字 島根県教育委員会教育長

号数 第15号  
発行日 昭和46年10月1日  
編集行 島根県立図書館  
松江市内中原町52  
TEL (0852) 22-5725  
印刷 (有)高浜印刷所



## 読書週間によせて

何のために本を読むのか。研究・教養・娯楽のため等々と答えは、いろいろ出るであろう。その目的・意義や方法は人それぞれに異なってはいるが、いずれの場合にも、一冊の本を読み終えたという喜びは大きい。それは文字が読めたというだけではなく、その文字を通して一つの新しい世界を知ったこと、新しい経験したことになるからである。新しいものに目を開いたのである。このことはまた自己を広めたこと、自分自身が広く豊かになったことである。新しいものに目を開き、自己を広く豊かにし、充実させ、そして深く考えて、生きていくこと、それは何とすばらしいことではないか。それは自分のためにも人のためにも。ここに読書の人生における深い意味と大きい価値がある。

では読書の方法はどうするか。理窟よりも何をおいても読むことである。自分で読むことであり、その読みは継続的であり、一冊の本を完全に読むことである。各人の生活様式に適応した読書の計画を立て、それが生活の一つとして継続されるよう工夫し、それは実行されねばならない。第一頁より最終頁まで完全に自分で読み切ることであって、要約や筋だけを読んだのでは、その書物を読んだことにはならない。

一冊、一冊と読み重ねていく、その喜びは感激的である。そこには自己の年輪が刻まれている。多くを書く紙数はないが、要するに読むことであり、読まねばならないことである。

小原幹雄

# =新旧館長あいさつ=

## 図書館の恩沢

前館長 榎野 健治



炎暑のながば、あわただしくも県立図書館を辞去し、長年の公職からお別れしてから、早くも2カ月経ちました。  
秋深い郷里で、ルーラルな生活に混入しようとして

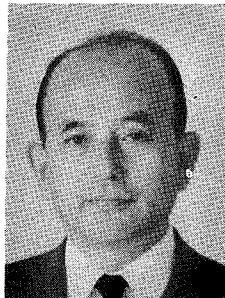
いますが、やはり一番思い出すのは図書館でつとめた四年間であり、そのことは今も図書館が私の中に生きていることだと思っています。在職中、公私にわたり図書館はじめ県、県教育委員会また利用者の皆様などからお寄せ頂いた、親身に余るご厚情を押し、今更ながら感謝のほかなく篤くお札を申し上げます。

過ぐる日には、ときたま停滞し勝ちと自他とも意識させられたという島根県立図書館も、昭和43年10月新館建設を機に切り放たれた井堰のように図書館のバイタリティーが奔流して、図書館の活動が画期的に進展したことは関係者の誇りでしょう。丁度その時期に私もその一員に加えて頂きましたことは幸がありました。しかし、図書館が自らその使命感と意識しているその姿にまで発展するためにはこれからのご苦労にかかっていると思います。

新館長を先陣とする図書館の皆様が、住民一人ひとりに対する知識情報を提供する一途な情熱と愛情が私達片田舎の隅々まで浸透してくることを期待し、心から待ち望んでおります。図書館はドルにも円にも強く、沖縄も台湾にも程近く、来る人にも地域の人々にも、そのことについて、図書、資料でお訓し下さる訳ですから、我々も何かにつけて寄りすがりたいものです。私はよき図書館利用者の一員になりたい。

## 就任にあたって

新館長 速水 保孝



・正直なところ、県立図書館になるなんて、私自身夢にも考えてみなかった。

だから、『奇妙な形をしている建物、位にしか評価していないかったし、他の関心を持ちようもなかつた。

ところがである。いろんな事情から、この超近代的な建物の主人公になってしまった。

生き馬の目を抜くという東京生活から、急に静かな松江に帰って来たという関係もあるが、実に驚いた。こんな勤め場所もあるものかと……。

第一に、人の足を引っぱってやろうなどと考えるような職員か、一人もいないということである。他人の犠牲において自分の出世を図る小役人根性など、みじんも見られないということだ。

これは一体どうしたことかと自らに問う

カール・マルクスは、人間の最も本源的な欲望として、「食欲」をあげたが、人間がある程度の物質的欲望を満足すると、智的欲望と性欲が、がぜん頭をもたげてくるという。

「円」を切り上げねばならない程の物的繁栄は、自然を破壊し、人間を荒廃させてしまったともいえる今日、都会の若者達が、心のふる里を求めて山陰を旅する。彼等が志向するものは、第一に芸術家、第二にジャーナリスト、第三に学者になりたいという。役人は最後尾である。

既にして、若者達にとっては、価値体系が変ってきている。若者の世代、二十一世紀への展望は、智的欲望への模索である。それは同時に図書館繁栄の時代であろう。

静かに図書館活動をするものは、二十一世紀への時代の先駆者である。だから、人の足を引っぱるなど、彼等にとっては、論外の事柄であろう。私もそうなりたい。

私は胸を張ってあるこう。仕事に誇りを持てる時代はもう直ぐそこに来ているから。

## レファレンス・コーナー

(問) 今年(1971年)は火星が地球に大接近する年であるが、この前大接近した年はいつか。

(問) 1924年8月23日。

火星は平均して2年2ヶ月ごとに地球に近づくことになっているが、大接近するのは一世紀に何度もない。最も条件がよいのは8月29日に接近する年であるが、今世紀でこれに一番近かったのは1924年の8月23日であった(今回は8月12日)。今世紀のうちにはこれより条件のよい接近は起こらなく、将来においては2003年8月30日の接近が素晴らしいということである。

以上のこととは「天文年鑑 1971年版 72~75ページ」に説明されている。理論的に詳しいものとして次の資料がある。

佐伯恒夫 火星とその観測

天体観測シリーズ 5

昭和43年 19~23ページ

(問) 七夕(タナバタ)の伝説について知りたい。

(答) 七夕の伝説は中国の伝説に「織女と牽牛」や

「遊子と伯陽」など数種あり、またギリシャ神話に「オルフェウスの伝説」が知られている。一番有名なものは「織女と牽牛」の話であるが、これは今から3000年も前の周初の頃からあったとされ、わが国には聖武天皇の6年秋7月7日に宮中で七日の宴を催されたことが記録に残っているので、かなり早い時期に伝来したと思われる。わが国では棚機津女(タナバタツナ)と彦星という名で知られている。なお織女と牽牛の各星はこと座のアルファ(1等星)と、わし座のアルファ(1等星)で、天の川をはさんで輝いている。七夕の伝説について書かれた資料は多くあるが、ここでは次の2冊をあげておく。

村上忠敬 星座物語 恒星社厚生閣

昭和41年 53~61ページ

野尻抱影 星の神話伝説集成 恒星社厚生閣

昭和30年 163~172ページ

(レファレンス室担当)

## 《司書のメモ》

ひとしきり鳴いた蝉の声も止み、秋の深まりを一段と感じさせるこのごろ、図書館もいっときの夏の混雑から解放されて、静けさがよみがえってきた。

そういうなかで、9月からカウンター合理化による今までの参考室と郷土資料室との合併が実現した。これを機会に除々にわが図書館の運営も、時代に応じた変革が行なわれていくだろう。これは喜ばしいことだと思う。激動する社会変動に対処するには「動きのある図書館」をキャッチフレーズにせねばならないからだ。

思うに、とかくマンネリに墮しやすいのではないか。これは人事異動のない専門職制度にも困っていると思う。往往にして「井の中の蛙」となって、自からがそれに気づかない。そうならないように、図書館界では、最近相互協力が叫ばれだしてきた。

これは資料交換を目的とするだけではなく、職員同志の交流を通して、お互に啓発される点で、非常に有意義かつ大切なことだと思う。

司書の職は、一人でこつこつとする仕事だという一般評価が大勢を占めている。いわゆる自己にうちかって己を向上させていかねばならない。何を目ざして、何によって啓蒙していくのか、それを発見して、はじめて、本を座右において、研究できる体制が形成されていくのではないか。

だから若い時こそ、何でも見て、何でも首なり頭を突っ込んで、そこから善しとできる最高のものを見い出して、じっくり取り組んでいっても遅くはないではないか。

そういう意味で、相互協力も近辺から、除々に遠隔地に及んで、司書職員の広い社会知識、図書館情勢を収穫できたら、そしてそこから何かを得ることができたら幸いに思う。

司書補 新宮洋子

# 公立図書館の広場

## 木次町立図書館

### 概況

昭和41年、検察庁跡に木次町立図書館が誕生した。12月15日開館。町内から寄贈してもらった図書1,656冊と購入分の57冊とをもって開館した。購入分は百科事典ばかりで、その半分はアメリカのエンサイクロペディア。初日は、青年2名、中学生が5名来た。当分は館内だけで、館外貸し出しは一切しない。年度末までの開館80日間に566人の入館者があった。1日平均7.1人である。最高は高校生240人、小学生がこれについて167人。学籍のない一般人は25人だが、この25人は受験前の浪人がほとんど。これらのことから、皆、図書を利用に来るのではなく、(参考書は全くなかった)場所を借りに来たとみていい。

この傾向は今年8月12日、新館に移転するまでつづいた。ピークには閲覧室はもちろん、廊下といわず、物置きといわば学習室であふれた。児童閲覧室をもたないため、児童の喧嘩で勉強できそうもないと思われるのによくこりずに来た。

ところが、こちらに移ってからは、全利用者は、夏休みのピークには、日に百人を越す盛況ぶりを示しているにかかわらず、高校生に限り常連が姿を見せなくなった。日曜などにも、10人とは来ない。旧館では閲覧室が79m<sup>2</sup>が3部屋に分かれていた。こんどは、天井壁面に床も美しく装備された。97m<sup>2</sup>の大ホールである。移転前も、「ここがいい、街の方へ移らないでほしい」といっていたし、こちらへ来てからも、「向うは、緑の山にかこまれていてよかつた」という。新館は奥まった所に、20m<sup>2</sup>の学習室を用意しておいたが、夏休みは主として、宿題の図表づくりの中学生が連日占領していた。

### 読書推進

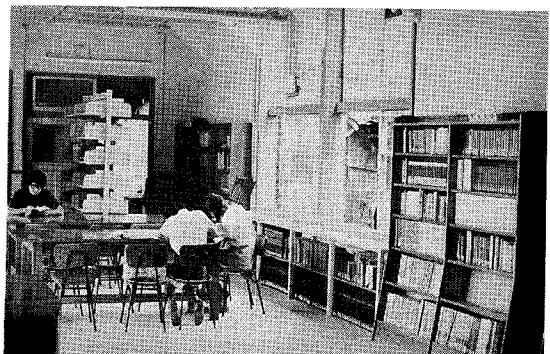
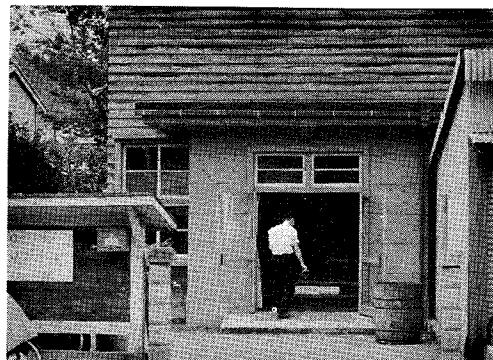
今度の所は繁華街からはずれているが、町並みで、あちらの人里離れた谷間とちがって便利この上もない。小・中学校・諸官庁も近くにある。利用者は3倍にふえた。うれしいことに一般人が多くなった。登録者中一般人を去年と今年とくらべると、8月末現在で27人対53人である。お母さんがたが多い。文学が他を圧して多いのはいうまでもないが、歴史や自然科学に関するものがよく出た。それらについて

漫画全集をもつ「芸術」が多く、家庭や家庭教育をふくむ「社会科学」「工業・工学」が案外ふるわない。

今年の初めから斐川小学校下全部落のPTAに団体貸し出しを開始した。それまで上口部落が3年間つづけていたが、同校の肝入りで全部落に波及した。毎月自転車または自家用車で、世話係りのお母さんがたがダンボールの箱につめて返しに来、自分らで選択しては持って帰る。忙しくてなかなか読めません、とかいってはいるが、借りた本の90%は読んである。

また、六月頃から宇谷(旧日登村)の婦人会、湯村(元温泉村)の青年団が団体貸し出しに加入した。

読書傾向は、やはり断然現代小説が多く、児童図書がこれについている。一ヶ月間10冊(一セット)ないし30冊十団体がごっそり持て行く上に、毎日何十人の小学児童が一人三冊ずつ個人貸し出しを受けては持て帰るので、児童図書の書架は大穴があり、現代小説は、乏しきに困るといった状態である。



### 今後の課題

一般人への貸し出しが漸増の傾向にあるが、まだ読んだ本について話しあうというところまで至っていない。婦人がたの希望として、本は読みたいが、どういう本を読んでいいかわからない。良書をすすめ、紹介してほしいということが多い。読書推進を全町におよぼすには道ははるかである。今の所自動車文庫のぞみもないし、どう隅々まで波及させるかが当面の課題である。

# よい社会 ひとりひとりの読書から！

## — 第25回読書週間事業決まる —

昭和22年の秋、荒廃した国土と、混乱した世相のなかに、一筋の光を投げることができるならばと、第1回読書週間は実施されました。

それから20数年、読書週間も、恒例の秋の国民的行事として、定着をみるにいたり、本年も来たる11月3日の文化の日を中心に、前後2週間にわたって一斉にくりひろげられます。

県立図書館では、この読書週間に呼応して、次のとおり週間行事を決定しましたので、関係各方面のご協力を特にお願いいたします。

### (1) 第3回読書普及振興大会

県下の読書会員をはじめ、各市町村社会教育、公民館、配本所の各担当者の参考を集め、講演や、体験発表、研究討議をおこない、読書普及の振興を図るために次のとおり大会を開きます。

○とき 11月8日(月) 10時～16時

○ところ 島根県立図書館集会室

○日程

1. 表彰式 読書普及に貢献した人

2. 映画上映 読書普及映画「虹」

3. 読書体験発表

4. 講演 週刊読書人編集長

長岡 光郎(予定)

◎ 大会にはどなたでも参加できますので市町村



教育委員会を経由してお申し込み下さい。

### (2) 移動図書館特別巡回

市町村立図書館およびモデル文庫の育成援助をはかるため、図書館車“しまね号”により読書週間の期間中に関係市町村を巡回し、図書の貸し出しや、読書指導をおこないます。巡回日程は次のとおり。

月 日	巡 回 地
10	市町村立図書館 モデル文庫
10.27	大田・浜田
10.28	益田・津和野
10.29	柿木
11.1	安来・布部
11.2	木次・大東
11.4	三刀屋・頓原
11.5	大社 赤来
11.6	八雲
11.9	出雲 桜江
11.10	川本・石見
11.11	瑞穂

### (3) 「郷土文学に親しむ会」を語る座談会

日 時 11月13日(土) 14時30分から

場 所 県立図書館集会室

出席者 島大文理学部 森 亮先生

松江工業高校 池野 誠先生

山陰詩人 宮田 隆先生外

## 県立図書館行事予定

10月～12月

項目 月 旬	事 業 名	場 所	展 示
10 上	秋季ばく書(10日間)	当 館	全国観光パンフレット展
	中国地区公共図書館職員研究集会	〃	
	県図書館協議会(第2回)	〃	
	図書製本修理並びに整理技術講習会	西郷町	
11 上	移動図書館特別巡回	関係市町村	高校新聞展
	県公共図書館協議会総会並びに研究会	浜田市	
	読書普及振興大会	当 館	
	自動車文庫巡回(第4回)	関係市町村	
12			国定教科書復刻展
	県図書館協議会(第3回)	当 館	

# 良書紹介

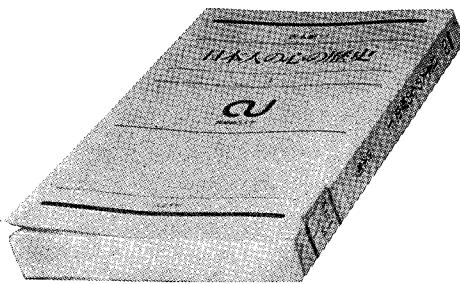
## (1) 「日本人の心の歴史」上・下

唐木 順三著 筑摩書房

—著者はしがきより—

筑摩の「総合大学叢書」百巻のうちの一冊として、「日本人の心の歴史」を書くことになった。日本人のもつ鋭敏な感受性、それを最もよく現わしているのが季節感であろう。日本人は心のほどを季節に託して表現してきた。季節に対する嗜好は個人の性格の反映であると同時に、時代の反映である。個人により時代によって異なる季節感覚、嗜好の背後にある時代の性格を描きだし、それによって日本人の心の歴史を誌したい。心を感覚、感情に接近している場面でとらえることによって、抽象的になりやすい、いわゆる精神史を具体的に描いてみたい。

巻を上・下に分って上巻では古代から中世まで、具体的には芭蕉までを、下巻では近世から現代までを扱うこととする。



## (2) 「村で病気とたたかう」

若月 俊一著 岩波新書

戦前の革新派の医師の半生を著者自身で描いたもの。昭和20年学生運動で停学処分を受け、治安維持法違反で拘禁され、2度も転向した東大卒の外科医が恩師の紹介で信州の佐久高原病院へ赴任して行った。革命家を失格はしたが、人民の中への精神を支えにこの病院へ就職し、農民の中へはいっていった。

著者はこの本で次のことを述べようとしている。

第一に、医師として農村に入り農民とともに生活し、その心をとらえることがいかに重要かということ。

第二に、その農村の現状の中で医療保健の技術者が

無医村の環境とたたかって、農民の健康を守ることがどんなに苦しいか。第三に、從来健康を犠牲にしてかえりみなかった百姓根性から農民を解放し、その意識を変革して人権意識にまでたかめることの意義である。このことこそそのまま今日の日本の平和を守る運動につながるというのが著者の考えなのである。

農民とともに精神は農民を啓蒙はするが、ともに闘うという思想ではない。医療の限界を感じさせられる。

## (3) 「21世紀の日本」

内閣官房内閣審議室編刊

これは図書というより、9グループ17冊から成る研究報告書です。テーマは国土と国民生活の未来像の設計。

内閣では、21世紀の初頭における日本の望ましい国土と国民生活の総合的な姿ならびにこれを実現するための全般的設計と実在の都市等をモデルとした大都市、中小都市、農山漁村の具体的設計を募集し、これに対し多数の研究グループの応募から9グループに対して研究を委嘱したものです。各グループは2年有余にわたって人文科学、社会科学、自然科学等の諸分野にわたって研究されたものです。これが今後の日本のあり方を展望する上で参考になれば幸いです。

## (4) 「蒼ざめた日曜日」

曾野 綾子 桃源社

曾野綾子という作家は短篇もので冴えたうでをみせてくれる。すべての情念を超越したニヒリズムである。人は努力しても報われることがない。誠意をつくしても報われることがないという人生の不条理をすっきりと語っている。善意の人が不幸になると、人生の救い難さを認めた時そこには不思議な心の平安がある。諦念の美でしょうか。

この小説には14篇の短篇が収録されています。

司書補 藤井 幸子

# 寄贈図書

S 46. 3月～9月

図書名	住所	氏名
島根県議会史第5巻	松江市	島根県議会
年刊歌集	〃	島根県短歌連盟
回 想	〃	松江中学 昭五会
昭六会誌	〃	昭六会
島根県職二十年史	〃	島根県職員労働組合
御富家御代代略記	益田市	益田市立図書館
鉄師田部家の 経営構造	松江市	佐原甲吉
不味公御一代茶会記	〃	石原春莊
共有林経営の 動向と開発資金	〃	中尾 鉱
石見年表	江津市	江津工業高等学校
時差の旅	松江市	藤原恭一
三瓶山の自然		島根県
西欧自由主義 史学の研究	広島市	千代田 謙 (郷土人)
句集つね		田室敏治
安来市誌	安来市	安来市教育委員会
振分け荷物	東京都	沖島謙三
遊雲の旅	松江市	米沢天崖
瘦せた虹	能義郡	柴田牛朗
立替え立直し	松江市	伊藤公一
大社一紀行と詩歌一	大社町	梶谷 実
巡りあいて	〃	〃
寒 蟬	出雲市	山本 燐
八束村誌	八束町	八束町公民館
温泉津町の伝説	湯郷郡 温泉津町	温泉津町教育委員会
国語の早期教育	益田市	石見詩人社
大社町明治百年史	大社町	小村尚司
島前の文化財第1号	隱岐郡 西ノ島町	隱岐島前教育委員会
出雲隱岐の民具	出雲市	石塚尊俊
石見古事談	浜田市	浜田市立図書館
出雲問答	簸川郡	佐田町教育委員会
石見三隅史蹟	〃	〃
掛合町誌	〃	〃
代官所跡表門および門 長屋修理工事報告書	大田市	大田市教育委員会教育長
山陰古墳文化の研究	松江市	山本清先生退官記念論集刊行会



— 6月1日から8月末日まで —

- 6月1日 広瀬地方民俗資料展（6月中展示）  
 5日 古文書を読む会入門講座  
 9日 千葉県教育委員視察見学  
 12日 文化映画を見る会、ステレオコンサート  
 15日 松江市立城北小学校3～4年80名見学。  
 図書館婦人教室  
 16日 県公共図書館協議会総会並びに研究会  
 18日 読書会リーダー研修会（於、浜田図）  
 19日 古文書を読む会  
 22日 B.M（八束コース）  
 23日 B.M（平田、大社コース）  
 24日 B.M（島根半島コース）  
 25日 B.M（伯太コース）  
 郷土文学に親しむ会  
 29日 B.M（那賀コース2泊3日）  
 30日 中国地区図書整理技術講習会（於、集会室、2日間）  
 (6月中閲覧者総数 8,909人)
- 7月1日 山と高原パネル展（7月中展示）  
 二ヵ月間閲覧時間の延長（19時まで）  
 3日 古文書を読む会入門講座  
 9日 図書館協議会（於、集会室）  
 10日 文化映画を見る会、ステレオコンサート  
 14日 移動文化教室（4日間、吉田村、横田町、広瀬町）  
 岩手県教育委員長来館視察  
 17日 座席指定制の実施 古文書を読む会  
 20日 図書館婦人教室  
 県図書館協会通常会（於、むらくも会館）  
 B.M（広瀬、仁多コース、3泊4日）  
 22日 映写機認定講習会（大東町2日間）  
 23日 郷土文学に親しむ会  
 27日 映写機認定講習会（大田市町2日間）  
 29日 松江市立朝日幼稚園30名映画學習  
 (7月中閲覧者総数 13,615人)
- 8月2日 レリーフ巧芸画（8月中展示）  
 3日 郷土の歴史講座（7日まで）  
 4日 映写機認定講習会（西郷町）  
 7日 古文書を読む会入門講座  
 9日 B.M（邑智コース3泊4日）  
 14日 文化映画を見る会、ステレオコンサート  
 17日 映写機認定講習会（石見町、大田市）  
 21日 古文書を読む会  
 斐川町婦人会70名見学  
 23日 B.M（美鹿コース4泊5日）  
 24日 図書館婦人教室  
 31日 郷土資料室移転（調査研究室あと）  
 (8月中閲覧者総数 18,923人)

# 新着資料の紹介

## I. 図書資料

### ○総 記

記録の百科事典

{ 日本一編  
世界一編

### ○哲 学

道徳情操論（上・下）

人間形成における倫理学

人間の条件

未来を生きる

フィーリング・ラブ

### ○歴 史

謎の古代争乱

律令時代の農民生活

王朝の映像

新しい世界史像の探求

### ○社会科学

情緒障害児の教育

日本の村落共同体

保育所と保母たち

### ○自然科学

自己開発法

めがね読本

ヨガ叢書1~5

ニホンザル

疲労の研究

### ○工 学

あなたは車の故障に強くなる

ラリー入門

世界の鉄道'71

(資料) 近代日本の公害

### ○産 業

日本の商圏

細田順一郎  
R・マクワーター

アダム・スミス  
久保田信之

マン・フォード  
A・J・トインビー

石渡 利康

推理史話会  
滝川政次郎

角田 文衛  
前嶋 信次

中村 吉次  
猪野 美子

武田 豊  
日本眼科医会

沖 正弘  
西川 治

大島 正光  
大島 正光

富家 知道  
内山 弘紀

朝日新聞社  
神岡 浪子

室井 鉄衛

目白三平鉄道物語  
山村の変貌と開発  
強きの投資と弱きの投資

### ○芸 術

日本美の意匠  
美術史の基礎概念

日本想芸史

現代の芸談

### ○語 学

国語音韻論

言語の構造

(日英仏西) 4カ国語会話

ことば紳士録

### ○文 学

源氏物語講座全9巻

清少納言

同人雑誌入門

萬葉遠足（上・下）

最後の時

ヒロシマの花

### ○郷土資料

山陰古墳文化の研究

不伝流兵法口伝書

木園福羽美静小伝

### ○レファレンス室

俳句鑑賞辞典

現代産業用語を追う事典

### ○小中学生室

ジェインのもうふ

アリの世界

風あらきトロイア

福翁自伝と福沢諭吉

ちびくろさんぽ—家庭用紙しばい—

A・ミラー  
栗林 慧  
M・ブレイマー  
鹿野 政直  
川崎 大治

中村 武志  
山村振興調査会  
A・ハース

水尾比呂志  
ヴェルフリン  
中村 重勝  
伝統芸術の会

馬淵 和夫  
守屋 隆司  
一色 忠良  
松村 明

山岸 德平  
岸上 側二  
森下 節  
橋本 哲二  
河野多恵子  
E・モリス

山本 清  
浅山 一存  
加部 嶽夫

水原秋桜子  
有沢 広巳

## 2. 視聴覚資料

### 教育映画の部

番号	題 名	巻数	内 容	対象
467	若い年輪	カラー 3巻	人手不足という深刻な問題を背景に山に生きる人々が林业の近代化に取り組み、しかも林业後継者が山に生きる喜びを真に自覚していく姿を感動的に描く。	成人 青年
468	色彩と生活	カラー 3巻	学校教材、企業内教育訓練用として、色彩の原則（理論）をわかりやすく解説し、色彩の科学的管理の問題を考えていく。	成人 青年 高年
469	母と子の対話	3巻	夫の遺志を継ぎ、スポーツがもつ人生的な意味をひたむきに追求し、実践する母と息子の姿を描く。	成人 中・小
470	よみがえる金色堂	カラー 5巻	金色堂の解体修理の様子を昭和37年から7年間にわたり記録したもので、わが国の古くからの伝統的な技術的一面を見せる。	成人 青年 高年
471	神々のふるさと	カラー 3巻	島根において古くから培かれてきた伝統や、風光明いびつな神々のふるさとを紹介する。	成人 青年 高年